

2020年6月22日(月)
外国語活動Ⅰ 8:45-10:00

“Tell me and I will forget, show me and I may remember, involve me and I will understand.”

※9～10章は小学校の授業と直接関わるものではありません。英語を教える際に知っておいて欲しい英語の知識と、自らの英語力をあげるための「英語の学び方」が書いています。シャドウイングにはかなりのページ数を割いていますが、書いている人の思い入れが強いのかもかもしれません。

※発音についてもかなり詳細な説明があります。英語専攻の学生には必要な知識ですが、小学校の英語を教える際に全てが必要という訳ではありません。講義では学習指導要領に示されている内容や実践上必要なことを取り上げたいと思います。学習指導要領解説の中に小学校外国語で指導すべき内容が示されています。資料を添付していますので前もって目を通しておいてください。

※今回の講義では先週も予告しましたように、前半の15分を使ってスモールトークの練習をグループに分かれてやってもらいます。スモールトークの意義を理解すること、そしてスモールトークができることが小学校で英語を教える際の「知識」と「英語力」です。できれば毎回やりたいと思うので練習のつもりで行ってください。4年の学生で小学校教員採用試験を受ける皆さんは今年度もスモールトークがあると思いますのでその練習もかねて行ってください。

※来週は授業ビデオを視聴したいと思えます。本講義の最終目標は、みなさんが自信をもって小学校外国語の授業ができることです。その目標に向かって授業を計画・実施していきたいと思えます。

6月15日(月)の授業リフレクションから

自分の英語の授業を振り返っていると、単語をテストのために覚えていたので、あまり定着がなかったので、会話の中で使っていくことが定着にいいのだろうと思った。(K)

英語の文法ができなければ英語ができるようにならないという先入観があったからこそ、英語が苦手だと感じていたと振り返りました。英語は簡単な英単語でも伝えることが大切であり、伝えようとするのが英語の力を身につけさせると考えました。スモールトークを

したが、自分の話したいことをうまく伝えることができず、話題作りをすることも会話する上では大切だと思うので、身近なことに関心を持って過ごすようにしていきたいです。(A)

☞小学生の興味関心を知ることも大切。

また、small talk では、言いたいことが日本語で浮かび、それを英語に変換しようと思うと、主語や述語は何か、この単語は英語で何と言うのか、と考えてこんでしまった。それでは、子ども達には「英語が難しく楽しみがない」と思われてしまうようで不安になった。これも私の課題のように思う。(T)

☞いい慣れることが大切。スモールトークの機会を多く持とう！

最初の方のグループディスカッションで、今までの英語の勉強の仕方・方法を話し合い、みんなの意見が様々に飛び交い、とても興味深かった。英語の「単語」を1つ覚えるだけでも皆それぞれのやり方が異なり、また「単語テスト」一つを取り上げても、「役に立った」という意見や「テストしすぎですすぐ忘れる」など感じ方が違う。私がこのディスカッションを通して思ったことは、学習した単語、文法を読む・書くだけではなく、実際の児童の生活場面に活かし、英語を喋る環境を作り、「英語で伝える力」や「伝えようとする意欲」を身につけさせる事が大事だと感じた。(T) ☞これがスモールトークのポイントです。

グループで外国語の勉強法について話し合ったときに、小学校の外国語活動は体を動かしたり話したりすることが多かったが、中学校からは自分の意見を話す活動が少なくなったという意見があった。それは外国語活動だけでなく、ほかの教科でも正しい答えを言わないといけないという考えが強かったせいか、なかなか意見を言えなかったことと関係していると感じた。☞なるほど。

グループでのスモールトークは誰かが相手を指名し、その人に質問を投げかけ、相手が答えるといった流れでおこなった。好きなスポーツやネコと犬どっちが好きか、どこに行きたいかなど様々な質問がでた。質問に答えるときに自分の言葉を英語で表現することができなかった場面があり、そのときに「自分の考えをうまく伝えたい！」と思い、内発的動機付けによる英語の学習意欲が高まった。子どもたちにこういった学習意欲が高まる体験を何度もできるように教師は授業を作らなければならないと感じた。とても楽しく学べた1時間でした。(Y)

グループセッションで英語は大量のインプットと大量のアウトプットが必要だと聞いて、私にはアウトプットをする機会が足りなかったんだなと気づくことが出来た。また、グループセッションで、small talk ということで英語で少し会話をしたが、その活動が思いのほか楽しかったので、また、出来たらいいなと思う。(Y)

また、あまり授業で何をやったのか覚えていないということも分かり、自分から進んで、何かをすることの方が記憶には残りやすいと思った。(U)

文法や語彙を一方向的に指導されると、学習者の側からの「気づき」はほとんど起こることはありません。「気づき」というのは、「目的、場面、状況など」が明確に設定されたところで、英語を「聞いたり、読んだり」することを通して、単語の意味や、文の構造などを推測しながら理解していくことを言います。このことを「インプットを通して形式(語彙や文構造)に気付く」と言います。

一方、「目的、場面、状況」が明確に設定されたところで、「話したり」、「書いたり」しようとする時に、自分の中で言えない語句や表現があることに気付きます。このことから、アウトプットをすることによって学習者は「自分に不足している語彙や表現」に気付きます。また、そして、それによって、学習者は、どういうふうに話せばよいのか、書けばよいのかということを考えることになります。それが言語の習得を促進することになります。

実はコミュニケーションを通して学ぶという考え方自体は新しいものではありません。1970年代から「コミュニケーションのために学ぶ」のではなく「コミュニケーションをしながら学ぶ」という考え方が望ましいということが言われていました。コミュニケーションをメインにした「コミュニカティブアプローチ」や、実際のコミュニケーションと同じような方法で学ぶ「ナチュラルアプローチ」などがこの考え方を取り入れた教授法です。

今回の学習指導要領が主張する「言語活動を通して学ぶ」というのは、再び、この考え方に注目して、授業を改革して行こうという主張でもあると考えることができます。

※浦添市立当山小学校のスマールトークを観てみます。

この活動は「日常生活」という場面の中で児童は聞き取っていきます。たとえば get up という単語が分からない児童に場面も脈絡もなく、I get up at seven in the morning. と単独の文をいくら聞かせても児童は何のことかわかりません。推測する余地さえありません。

ところが、先生の日常生活の場面を与えられると「朝のことをなんか言ってるので『起きる』という意味なのかな」と推測できます。Go home, にしても、go to bed にしても同じことが言えます。

この単元では usually, always, sometimes などの頻度を表す表現も学ぶことになっています。担任の先生が I go to bed at eleven. と言ったあとに、専科の先生が Always? Usually?

Sometimes? と尋ねています。頻度を表す語を一つずつ取り出して日本語で意味を言ったのでは場面から意味を推測する力につきません。本事例では usually と always の意味の違いも、何となく推測することができます。これが場面を設定して聞かせる際の最大のメリットです。言語活動をとおして意味を推測させ、気づきを起こさせています。

児童は、担任の先生と英語専科の先生の本当の日常生活ですから、興味をもって聞いています。身近な人の本当の話は聞こうとする意欲を喚起することもわかります。

聞かせ方の工夫という点からみると、担任の先生と専科の先生は上手く相手の言ったことを繰り返しながら対話を進めています。繰り返すことで分かりやすくなります。また適度なジェスチャが児童の理解を助けています。分からないことを聞いても言語の習得という点からは意味がありません。児童にわかりやすいように話している点が良かったと思います。

第 9 章 英語コミュニケーション能力の高め方—シャドウイングによる聴く・話す力の向上

1. シャドウイングを用いた英語学習法

1.2 シャドウイングを用いた具体的な学習法

2. シャドウイング学習の効果とことばの処理メカニズム

第 10 章 英語音声のしくみ

1. 音声記号

2. 子音と母音

2.1 音声の産出課程

2.2 英語の子音体系

2.3 英語の母音体系

(1) 短母音

(2) 二重母音

3. 英語の強勢とアクセント

3.1 アクセント

3.2 強勢と弱形

3.3 イントネーション

4. 日本語を母語とする学習者にとって難しい英語の音

4.1 子音

4.2 出現する位置によって発音しにくい子音

4.3 母音

音変化 (p.160)

同化(assimilation)

脱落(deletion)

連結(linking)

<学習指導要領解説>

2 内容

〔第5学年及び第6学年〕

〔知識及び技能〕

(1) 英語の特徴やきまりに関する事項

実際に英語を用いた言語活動を通して、次に示す言語材料のうち、1に示す五つの領域別の目標を達成するのにふさわしいものについて理解するとともに、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する。

ア 音声

次に示す事項のうち基本的な語や句、文について取り扱うこと。

(ア) 現代の標準的な発音

(イ) 語と語の連結による音の変化

(ウ) 語や句、文における基本的な強勢

(エ) 文における基本的なイントネーション

(オ) 文における基本的な区切り

イ 文字及び符号

(ア) 活字体の大文字、小文字

(イ) 終止符や疑問符、コンマなどの基本的な符号

ウ 語, 連語及び慣用表現

(ア) 1 に示す五つの領域別の目標を達成するために必要となる, 第3学年及び第4学年において第4章外国語活動を履修する際に取り扱った語を含む 600 ~ 700 語程度の語

(イ) 連語のうち, get up, look at などの活用頻度の高い基本的なもの

(ウ) 慣用表現のうち, excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome などの活用頻度の高い基本的なもの

エ 文及び文構造

次に示す事項について, 日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに, 基本的な表現として, 意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること。

(ア) 文

a 単文

b 肯定, 否定の平叙文

c 肯定, 否定の命令文

d 疑問文のうち, be 動詞で始まるものや助動詞 (can, do など) で始まるもの, 疑問詞 (who, what, when, where, why, how) で始まるもの

e 代名詞のうち, I, you, he, she などの基本的なものを含むもの

f 動名詞や過去形のうち, 活用頻度の高い基本的なものを含むもの

(イ) 文構造

a [主語+動詞]

b [主語+動詞+補語]のうち,

名詞

主語+ be 動詞+ 代名詞

形容詞

c [主語+動詞+目的語]のうち,

主語+動詞+名詞

代名詞